



文苑

歸省

増山三雪子

指をりてさぞ待ちわびん二親は

暑きやすみにかへる我子を

西 升 子

森かげに打ひくはたやちゝ母の

まちにまぢます我家なるらん

森 雅 子

川そひに我を迎ふる人の影

母君も見ゆおとうども見ゆ

板 倉 止 子

父母にまみえん事のたのしさに

あつけさしらぬ今日の旅哉

あまたみし書の話の家つとの

板 倉 藤 子

錦にかへて親にまみえん

大 河 内 桂 子

はらからに持て來し苞を分ちつゝ

喜ぶ顔を見るがうれしさ

奥 村 學 子

故郷に飾る錦はあらなくに

吾家の庭に百合の花さく

佐 藤 朝 惠 子

夏しらぬ伊豆の海邊に友はあれど

親の御許をまづ音づれん

峯 百 合 子

たまさかに歸りし今日の心もて

いつも仕へん父母の前に

大 竹 伊 勢 子

幼子をともしなひ行きてこの夏は

老ませる母に見せんとぞ思ふ

佐 々 木 文 子

なつかしき家に歸りてたらちねの

優しき言葉さくが嬉し

水橋 康子

なつかしき山もこえたり橋ひとつ

渡らば岸にたれか待つらん

設樂御 幸子

吾門の一本まつも見え初めぬ

昔遊びし野路をこゆれば

鈴木 安子

語るへぎはえはなけれど夏毎に

歸るも嬉し故郷のいへ

印 東 益 子

ひと時も早く歸らんふるさとの

親兄弟よ如何にまつらん

印 東 昌 綱

今つさし我子の文を手にとりて

明日を待ちわふる親心哉

佐々木 信綱

夏ごとに歸りなれたる故郷は

父いまさねど戀しかりけり

梅雨晴

横山 碩

晴れぬとて喜ぶひまもなかりけり

村雲あやしきみだれの空

諏訪 忠元

さみだれは今朝しもやみぬ梅の實の

うみしころも晴れ渡りつゝ

矢田 香園

梅雨のはれし軒端をながむれば

洗ひてきよき松の色かな

くちなしの花

東くめ子

くちなしの花のをとめで物いはで

たいうちをみてうなづくがあはれ

たむくべきかくつきどころ道遠み

手折りこし花はしをればてにけり